

スローガン 「問い」を育てるNIE —思考を深め、発信する子どもたち

実践多彩、より深く



パソコン画面を見ながらレアウトを相談する出版委員の生徒たち

横手高定時制(横手市)

横手高校定時制(横手市)の出版委員は、学校新聞「青雲館新聞」を発行し、地域にも届けている。「たぐさんの人に学校を知ってもらいたい」という思いで始まった新聞製作は、今年18日の発行で第10号を迎えた。生徒たちは定時制高校の今を発信しようと、取材と編集作業に取り組んでいる。

「青雲館」は、横手高の校章

学校の「素顔」を発信

出版委が新聞発行に力

「青雲」にちなんだ校舎の名称。本年度の出版委員は1~4年生の17人で、A3判2枚の新聞を

渡部さんたち5人ほどの中心メンバーが内容を考え、割り振りにして各委員が取材、執筆する。



18日に発行された「青雲館新聞」第10号の1面



14日に開かれた「情報モラル講座」の講師にインタビュー。インターネットをどのように利用すべきかなどを聞いた。

生徒会誌の編集が主な仕事だった出版委。新聞製作を始めたのは、昨年度の委員の提案がきっかけだった。「定時制高校は動きながら通う生徒が中心で、年齢層も高い」というイメージを持たれることが多かったため、校外の人に「学校の現状を知ってもらおう」と、当時の4年生が呼び掛けた。

新聞製作を通し、委員は交流の幅を広げてきた。これまで地域の書店や自動車学校など、校外のさまざまな場所に赴いて取材。こと6月に秋田市で行われた県高校文化連盟新聞部会の講習会では、他校の生徒に声を掛けてインタビューした。

顧問の小川康講師は「青雲館新聞は、生徒のコミュニケーションツールという面もある。生徒自身が興味を持ち、主体的に取材した記事が増えしてほしい」と期待する。

渡部さんは「どんな学校かよく分からない、と言われることがまだ多い。新聞を通じて伝えていきたい」、矢代さんは「校外の話題を取り上げた記事に力を入れた」と意気込む。学校と地域をつなぐ紙面を目指し、委員たちは取材に励んでいる。

「新聞、活用型学力伸ばす」

NIE全国大会秋田大会の
実行委員長を務める阿部昇・
秋田大学教育文化学部教授
に、NIEの意義や県内の取
り組みの現状などを聞いた。



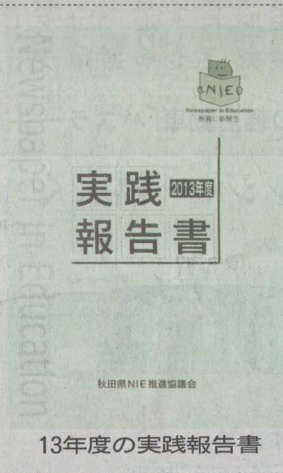
阿部 新聞にはあらゆる分野の最新情報が詰まっております。教材として宝の山。教科だけではなく、総合的な学習の時間や道徳など、さまざまな教育活動で使用できる。また、国際的に求められている活用型学力の育成に大きな役割を果たす。新聞は記事、見出し、前文、写真が構造的に組み合わさっており、情報を

阿部昇・実行委員長に聞く

読み解いて判断し、表現する力につながる。
若い世代が新聞を読まなくなっていると言われる。
阿部 民主主義を支えるため、確かな情報を伝える新聞が持つ役割は大きい。NIEには、新聞そのものの役割を広げる側面もある。子どもたちが新聞の魅力と大切さを知

義は今後さらに大きくなっていくだろう。
県内の取り組みの現状は、阿部 この10年ほど、確実に広がっている。学習指導要領に新聞活用が盛り込まれたことも背景にあるだろうが、それ以上に、新聞を使う良さが教員に理解され始めたからではないか。県内の教員は、そもそも課題解決型の授業が得意。NIEに関して、記事や写真をもとに子どもに深く考えさせる授業が行われている。
子どもの反応は、

阿部 初めは新聞になじみのない子どもでも、NIEに取り組みと興味を示し、面白さを感じてくれる。学校で学んでいる内容が、実際の社会や自分の将来にどうつながっていくのかを実感できることが、NIEの良いところ。
秋田大会はどのような大会を目指すか。
阿部 NIEは単に新聞に親しむ段階から、より質の高い思考力を身に付ける段階に発展しつつある。大会スローガン「問い」を育てるNIEにあるように、新聞を読んで自分の考えを広げ、それを主体的に発信できる力を育てることが求められる。秋田大会を、新しいNIEの出発の年にしたい。



ナへの回答を考える道徳の授業などが行われた。朝の活動にNIEを取り入れ、記事の感想を書く活動やスピーチ活動を続けた学校が多かった。
中学校は天図を読み解く理科の授業、高校は記事を通して需要と供給を学ぶ現代社会の授業など、さまざまな教科で新聞が活用された。校内にNIEコーナーを設けて記事を掲示したり、スクラップ活動を続け、進路指導に生かす取り組みもあった。

小中高の活用例紹介

県協議会 13年度報告書作成
県NIE推進協議会は、NIEの2013年度実践報告書を1千部作成した。日本新聞協会と県協議会が連携して認定した小学校9、中学校6、高校5の計20校の取り組みを紹介して掲載された悩み相談コ